

これからの比爪研究の方向

基調講演とパネルディスカッション

紫波町文化財団体協議会（樋爪館懇話会ほか町内歴史関連等13団体と特別会員10人で構成）が1月15日（日）に、新春歴史フォーラムを町情報交流館大スタジオでコロナ禍のため参加人数制限のうえ、町内外から約70名が出席のもとで開催された。

このフォーラムには、平泉世界遺産ガイドダンスセンター上席専門学芸員の羽柴直人氏が基調講演し、引続きのパネルディスカッションにおいては、（株）よんりん舎取締役専務野村晋氏がコーディネーターとなり、パネリストに赤沢まるごと博物館プロジェクト推進委員長長工藤睦夫氏、樋爪館懇話会副会長平井和夫氏、紫波町文化財団体協議会石幡信氏の3名がこれからの比爪研究の方向についての意見表明や提言等の熱のこもった討議が行われた。

羽柴氏の基調講演においては、外縁の宗教遺跡の研究として、高水寺、新山寺、蓮花寺について宗教的視点からの考察が必要。さらに平泉との比較研究として、平泉と直接比較し得る遺跡は比爪しかない。また逆もしかりである。それぞれの研究の進展が双方と奥州藤原氏の実態解明に結びつく。加えて本州北辺、東辺を視野に入れた研究として、比爪は比爪のみで完結していない。本州北辺、東辺は勢力範囲と認識すべきで広域的な視点が必要である。

一方、パネルディスカッションにおいては、平泉に次ぐ第二の都市として、比爪の認知度はあまりにも低いので、その向上対策が必要とされる。今後において、世界遺産平泉と並び立つ比爪の実像を極めていくとともに、紫波の歴史に関して市民の機運の醸成を図っていき、さらには、奥州藤原氏に関する高い評価を町内外に発信するなどの言及があった。

紫波町新春歴史フォーラム

町文化財関係団体協議会が開催



赤沢薬師堂七仏薬師（レジメより転写）



パネルディスカッションにおけるパネラーの3名

《《《 2月の行事予定のお知らせ》》》

2月15日 (水曜日)	第137回 月例発表会	午後7時～午後9時 赤石公民館 講義室 パワーポイントによる上映会 ① 八百年前の樋爪館・五郎沼予想図(CG) ② 紫波の史跡・遺跡【標柱コース】を巡る (ナレーター 櫻井早苗)
----------------	----------------	--

本会の名誉会長 高橋敬明氏 逝去

本会の創始者で前会長、現名誉会長の高橋敬明氏が肺炎のため入院療養中でしたが、去る18日逝去いたしました。（享年89歳）ご冥福をお祈り申し上げます。



旭日双光章
平成20年
秋の叙勲
にて受章

令和5年1月18日に開催した第136回月例発表会において、発表者が用いました資料から一部分を抜粋して掲載しましたのでご了承願います、

宮 良男氏の日本の仏教⑰ 臨濟宗

鎌倉時代に栄西が伝えた臨濟宗は黄龍派であったが途絶えてしまい、俊仍(1166-1277月輪大師)が伝えた揚岐派が主流となった。

法嗣を重んじ公案・座禅により現在まで引き継がれている。

公案：禅語録から抽出した師と弟子との問答～理論的知的な理解は受け付けない＝日常的感覚からの解説禅門答～公案によって「無位の真人」(真実の自己)に導く、同時に座禅を行い作務も重んずる。

狗子仏性 「犬に仏性はあるか」 、隻手音声「片手の拍手の音」

悟り：生きるもの全てが本来もっている本性である仏性に気が付くこと

仏性：言葉による理解を超えた範囲のことを認知する能力

鎌倉幕府・室町幕府の武家政権との結びつきが強く京都五山・鎌倉五山は全て臨濟宗寺院であり室町文化にも深く関わっていった。しかし足利氏の権力と共に衰退していく。

《臨濟宗の名僧》8名のうち盛岡にゆかりのある方長老・無方規伯

名 称	生存年	生誕地	記 事
規伯玄方 (方長老・ 無方規伯)	1588～1661	筑前国	宗対馬守の子弟で対馬藩の朝鮮との外交担当し二度朝鮮へ、朝鮮との修好文章改ざんの責任を問われ寛永12年(1635)盛岡へ(柳川事件)、藩主南部重直は厚遇した。 明暦4年(1658)赦免となり江戸へ、後南禅寺語心院の住持となる。栗山利章(大善)と親交があった。盛岡では南部鉄器、漢学詩文の教授、作庭、黄精飴(右図)を伝えた。



平井和夫氏の吾妻鏡にみる北条義時④

承久4年(1222)四月十三日に貞応(じょうおう)元年となる。

正月一日 奥州(北条義時)が先例通り垵飯(おうばん)を献上された。・・・(略)・・・
まず御剣(錦の袋に入れる)が進上され、足利武蔵前塚司義氏が差し上げた。

垵飯(おうばん)従者の服属を示す儀礼。鎌倉時代には有力御家人が鎌倉殿に酒飯を献上する儀礼となり、特に年頭 垵飯は御家人の序列を示すものとなった。

正月二日 垵飯(おうばん)。足利前武州(義氏)が進上した。

貞応三年(1224)十一月二十日に元仁元年となる。

正月一日 前奥州(北条義時)が垵飯を献上された。

六月十二日 辰の刻に前奥州(北条)義時が病気になった。

六月十三日 前奥州(北条)義時の死《毒殺説もある》

前奥州(北条義時)の病気はすでに臨終に近づいていたため、駿河守(北条重時)を使者として、このことを若君(三寅、のちの頼経)の御方に申された。恩許(おんきよ)があつて(義時は)今日の寅の刻に出家され、巳の刻[あるいは辰の刻とするか]にととうとう亡くなられた[御年六十二歳]。このところ脚気の上に霍乱(かくらん)が重なってなっていたという。昨日の朝から続けて弥陀の宝号を唱えられ、終焉の時までまったく弛むことがなかった。丹後律師(頼暁)が善知識としてこれを勧めた。(義時は)外縛印(げばくいん)を結び念仏数十回の後に死去した。まことにこれは正しい往生と言うべきであろうという。午(うま)の刻に飛脚を京都に飛脚を遣わせた。また後室(伊賀氏)も出家し、荘厳房律師行勇が戒師となったという。

六月十八日 戌の刻に前奥州禅門(北条義時)の葬送が行われた。・・・(略)・・・

